

「文芸倶楽部」所載「筆のすさび」について

山根賢吉

すでに目録に注記したように、「文芸倶楽部」第四巻第四編「臨時増刊 千紫万紅春の巻」(明31・3・23)の「雑録」欄に、「筆のすさび」と題した一葉の隨筆が掲載されている。一葉没後一年四か月の頃のことである。

その内容は、「樋口一葉全集」(筑摩書房刊 以下「新全集」と略称する)の「第三巻(下)」(昭53・11刊)所収の「感想・聞書11 さをのしづく」とほとんど変るところはない。同全集の脚注によれば、「原本が散佚しているため、旧筑摩書房版全集第四巻より収録した。冒頭の一字下げ、句読点濁点は草稿の原則通りに改めた」とある。「旧筑摩書房版全集」(「一葉全集」以下「旧全集」と略称する)「第四巻」(昭29・3刊)では、「さをのしづく」は「日記」の中に収められているが、「枕草

子」や「徒然草」の伝統に属するものと考えられるので、「隨筆」の中に収めるのが妥当であろう。新世社版「樋口一葉全集」(以下「新世社版」と略称する)「第五巻」(昭16・10刊)や、馬場孤蝶編の「一葉全集」(以下「孤蝶本」と略称する)「後編」(明45・6刊)では「隨筆」の中に収められている。新全集は、先の注記にあるように、「句読点濁点」及びルビを除いて、旧全集の本文と同一と考えてよい。ただし、段の分け方において異なっている。旧全集は四段から成っているが、新全集は十四段になっている。新世社版や孤蝶本では十五段になっている。「筆のすさび」もまた十五段に分けられている。内容から考えて、十五段にするのが最も妥当だと考えられるので、その場合の冒頭部と内容を簡単に示すと次のようになる。

(冒頭部は孤蝶本に拠った。括弧内は筆者が内容を簡単に要約したものである)。

- ① ある人のもとにて紫式部と清少納言のよしあしいかになどいふ事の侍りし (紫式部と清少納言の優劣論)
- ② 物かく筆はやはらかに持てゆび先に力のいらざるぞよき (書道論)
- ③ まつ人の音づれば聞事まれにして厭はしき人はしぼく来る (訪問客論)
- ④ おもひてはいと遠きこともいたりてはほどなき物ぞかし (三界唯一心論)
- ⑤ はかなくて世に落はふれたる人をおろかにつたなしとてあざけらんは耻かしかるべし (人生浮沈論)
- ⑥ 此月をいかさまにしておくらんあはれよもしなし (自家の貧窮)
- ⑦ 春の雪のおもひかけずいと深々とつもりたるに (すね者の浮評)
- ⑧ いざ連歌よまん下の句出し給へと人々いふ (萩の舎の連歌)
- ⑨ 物へもてゆくに筆のつか長くていと化し (筆のつか論)
- ⑩ 長三洲といふ人舌舐といふものをながく病みてうせき

(長三洲のこと)

- ⑪ 歌の論をよくする人あり (歌論と実作)
 - ⑫ つら之みつねは自然をうたひたる歌人なるべし (和歌衰亡論)
 - ⑬ よははかなくてをかしき物也 (世評のはかなさ)
 - ⑭ おろかやわれをすね物といふ (世評と心境)
 - ⑮ 春のゆふべよは花さきぬべしと人こ、ろうかる、頃 (貧窮と世のおかしさ)
- 以下、各段の上に付した数字で説明を加えたい。新全集は⑬と⑭を一つにしている。いずれも世評について記している点、共通するものがあるが、⑬は一般論に傾き、⑭は自己についての世評を中心としているので、二分するのが適当であろう。
- ところで、先述のように、新全集は旧全集を踏襲しているが、段の区分については、新世社版を参考にした形跡がある。新世社版では、⑬と⑭は一往分けられているが、その間が改頁になっているために、新全集編者はこれを連続したものと見誤った可能性があるからである。旧全集は、前記したように四段に分けている。これは右の④―⑮を一段としてまとめているのであるが、その理由は不明という外はない。一葉の原稿がそうなのでいたのかとも考えられるが、旧全集本文と新世社版本文とは、

ほとんど差が見られない。細かい点では、読点を句点に改めたところがかなりあり、読点を加えた部分もあるが、これは読者への配慮のため、編集者がなし得るものである。そのほかには、「萬」を「万」に、「才」のルビを「さい」から「ざえ」に変えているが、これも編集者の手になるものと考えられる。また、「さかひ」を「さかい」、「をさく」を「おさおさ」、「くひせ」を「くみせ」、「うたふ」を「うとふ」、「あひだ」を「あいだ」、「をさなだち」を「おさなだち」、「た、へらる」を「た、えらる」など、仮名の相違が認められる。これらは仮名遣の上から言えば、大部分、新世社版が正しく、一葉の用例でも（以下、傍線筆者）

幽玄のさかひを極むること（「水の上につ記」明28・5・

6）

式部はをさなきより（「さをのしづく」①）

とあつて、誤記または誤植の可能性が考えられる。特に⑧の部分で、

「いさを、たてよ大君の為とありし。（旧全集）

「いさを、たてよ大君の為」とあり、（新世社版）

と、旧全集は、カギ括弧のとじを落し、現在形で進行している話の中に、突如、過去の助動詞「し」を加えているのは理解に

苦しむところである。また、⑮の部分の「三日四日のかけ斗」は、新世社版で「三日四日のかて斗」とあるのを正しいとすべくである。

新世社版と孤蝶本との間にも、大きな差は見られない。ただ奇妙なことに、先にあげた旧全集と新世社版との仮名の相違は、一か所（「あひだ」―「あいだ」）を除いて旧全集と孤蝶本とが一致することである。旧全集のおどり字の使い方も孤蝶本に近い。もともと、仮名において四か所、ルビにおいて二か所の相違がある。もちろん、孤蝶本でも、⑧の部分に「し」はない。また⑮の部分は「かて」とある。

旧全集が、直接原稿に換ったかどうかは確定し難いが、もし原稿がすでになかったとすれば、孤蝶本を中心として、適宜、新世社版を参照した可能性がある。

新全集が、無批判に旧全集に換ったことは、⑧の部分に「し」があること、⑮の部分に「かけ」とあることよって明らかである。

この随筆が全集に収められたのは孤蝶本が最初であるが、孤蝶本・新世社版では「棹のしづく」、旧全集・新全集では「さをのしづく」となっている。仮名と漢字の相違に過ぎないが、なぜ旧全集は仮名に改めたのか、その理由もまた不明という外

はない。

ところが、この隨筆は、孤蝶本所収以前に、「筆のすさび」として、「文芸俱樂部」に掲載されていたのである。その内容は、前記のように、ほとんど変らないが、表記上の相違及び誤記・誤脱が多い。特に目立つ部分を段別にあげると、「筆」は「筆のすさび」を、「棹」は「棹のしづく」を、それぞれ示し、「棹のしづく」は孤蝶本に拠った。ルビは問題になるもののみを残した。

- ① はか／＼しき後見などもなくて、はなれけん程、(筆)
はか／＼しき後見などもなくてはふれけむほど、(棹)
香爐峯の雪に簾を於くなど(筆)
香爐峯の雪に簾をまくなど(棹)
はやう女の社會をはなれぬる人(筆)
はやう女のさかいはなれぬる人(棹)
たゞこの者を心と紙との故にして(筆)
たゞこの者を心と紙との中立にして(棹)
一人の心より起りて、さる大層をも構へ(筆)
人ひとりの心、ろよりおこりて大層をまかまへ(棹)
はかなくて世に落ちはなれたる人(筆)
はかなくて世に落はふれたる人(棹)

⑥ 質文の徒とか人の卑しがる物から、これを黄金にかへらる、ならば(筆)

質文の徒とか人のいやしがる物から、これをこがねにかへらる、ならば(棹)

⑦ 柳のものと結ばれとけぬ片恋や、(筆)

柳のいと結ばれとけぬ片こひや(棹)

これをいかさまに伝へてことやこのものにや、(筆)

これをいかさまにつたへてことやうのものにや(棹)

⑧ あはれにうき出だしぎまや(筆)

あはれにくき出しぎまや(棹)

同作に頭をなやまし居る(棹)

句作にかしらをなやまし居る(棹)

⑩ 二度目には咽喉へかけてはれぬ(筆)

二度目にはのどへかけてはれぬ(棹)

⑫ この調人の心をもと、して(筆)

そのしらべ人の心をもと、して(棹)

人すなほの心を貫びて、物事巧になり行き、(筆)

人すなほの心をうしなひて物事たくみになりゆき、(棹)

⑭ 儻に萩の舎がながれの末をくめりとも(筆)

儻に萩の舎がながれの末をくめりとも(棹)

いずれも、「棹のしづく」の方を正しいとすべきであるが、全般的に見て、「筆のすさび」は仮名を漢字に改める傾向があり、しかもそれをなした者と、ルビを付した者とは別人である可能性がある。例えば、⑥の「こがね」に「黄金」、⑧の「かしら」に「頭」、⑩の「のど」に「咽喉」の漢字をそれぞれ当てた人物は、恐らく原稿を見ていたであろう。しかし、「黄金」に「わうこん」、「頭」に「かうべ」、「咽喉」に「いんこう」などのルビを付した者は、原稿を見ていないと思われる。何よりも「萩の舎」の「萩」に「おぎ」とルビを付するのは、一葉の閲歴を知らざる者の手になるものと考えてよい。これらは編集者によって付されたものではないかと思われる。

以上のように、「筆のすさび」は、一葉の原稿にほど遠く、誤りも多く、全体として信頼し得る本文ではないが、ごく一部分ながら、再検討すべき点がある。先ず冒頭の一節は、孤蝶本以下すべて次のようになってゐる。

ある人のもとにて紫式部と清少納言のよしあしいかになどいふ事の侍りし

ところが、「筆のすさび」では、

ある人の許にて、紫式部と清少納言との、よしあしいかになどいふ事の侍りし

とある。これは「筆のすさび」の誤りとは断定できない。このように二つのものを並記する場合、晩年の一葉は、

さりし日、孤蝶の君と秋骨ぬしとふたりして来る（「水の

上日記」明28・5・3）

これよりは病氣と戦争との二つをこゝろみる覚悟なりなど、いひおこす（「水の上」明28・5・28）

川上眉山と我れとの間に、結婚の約なりたりといふうわさ成り（「水のうへ」明29・1）

のように、「とととと」の」としてゐる。これらの用例から考えると、こゝも「紫式部と清少納言との」とある方が正しいようである。ただし、次のような例外もある。

五十歩と百歩の違ひのみ（「水のうへ日記」明28・11・

5）

ねずみとひわの三まい着（「水のうへ」明29・1・6）

また、同じ段の、

才たけたりとはかくしてぞあらはれぬ（孤蝶本）

才たけたりとは、かくてぞあらはれぬる（筆のすさび）

とあるのは、文法的には後者が正しく、同じ隨筆の中でも物かく曇はやはらかに持てゆび先に力のいらざるぞよき

(3)

ほとけの道にも三界唯一心外無別法とぞ侍るめる(4)

ひたすらに厭ひははてじ名取川 なき名も恋のうちにはぞ有

ける(7)

とあって、一葉の文章や和歌の中では、係り結びは、かなり正確に使われている。

第四段の

何がしの官省とてもつとひて事をとるものなれば(孤蝶本)

何がしの官省とても、人つとひて事をとるものなれば(筆のすさび)

は、後続の文章に、「商社などのいと大きな人が人ひとりのころよりおこりて」とあるのから考えると、孤蝶本には

「人」が脱落している可能性がある。

第五段の

孔子の道にくだしめられたとへも侍る(孤蝶本)

孔子の厄に苦しめられたとへも侍り(筆のすさび)

は、「道」と「厄」とは、いずれが正しいか決定しかねるが、その他は「筆のすさび」の方が自然ではなからうか

第七段の

波のぬれ衣などいはんもふるればとて(孤蝶本)

彼の濡衣などいはんも、ふるればとて(筆のすさび)

も、「波のぬれ衣」は平凡で、「彼の濡衣」の方が勝っていると言えよう。

第八段の人名で、孤蝶本は「伊藤の与助」とあるのが、「筆のすさび」では「佐藤の与助」となっている。萩の舎に出入していた人物と考えられるが、いずれが正しいか検討すべきところと考えられる。

第十四段の

かくはかなき文字沙汰にはなりつ(孤蝶本)

よりは、「筆のすさび」の

かくはかなき文学沙汰にはなりつ

の方が正しいのではなからうか。また十五段の新社社版まで「三四日のかて斗」が、旧全集・新全集とも「三四日のかて斗」となっているのは、意味自体わからなくなっている。ここは「かて」が正しく、「筆のすさび」も「かて」になっている。更に「筆のすさび」が、孤蝶本以下と大きく相違しているのは、十五段も末尾に近く、

いかにして明日を過すらんとおもふにねがふこと大方はづれゆくもをかし、(孤蝶本)

とある部分が、「筆のすさび」では、

いかにして明日を過すらんと思ふに、いと事もなくて過ぎ行く、さりとはおかし。願ふ事大方はづれ行くもおかし

となつてゐることである。すなわち、孤蝶本以下のいずれの全集にも傍線部がない。この部分がなければ、意味は十分に通じない。したがつて、一葉の原稿には傍線部があつたはずである。たまたま孤蝶本がこの部分を脱落させたために、以下の全集はすべてこれに倣つたわけで、この事實は、旧全集も原稿を見ていなかったという一証にもなろう。

「筆のすさび」は、右に述べたように、本文そのものに多くの欠陥はあるものの、新全集の誤り、あるいは欠落を補うに足る部分もあることを指摘しておきたい。

最近刊行された青木正美氏の「幻の『一葉歌集』追跡」(日本図書センター一九八八・六刊)に、緑雨筆写の「一葉歌集」が翻刻されているが、旧全集第七巻「補遺」の「和歌」所収のものと比較してみると、一部分ながら、かなを漢字に変えてゐる歌がある。「筆のすさび」を筆写し、博文館に渡したのも緑雨だったかも知れないが、今は憶測の域を出ない。

参考までに、管見に入つた一葉書誌には、「筆のすさび」について記載されたものはない。